

厚生科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)
分担研究報告書

川崎病の治療と長期管理に関する研究
主任研究者 加藤裕久(久留米大学医学部小児科)

研究要旨 当施設における年齢が15歳以上の症例の経過についての分析

分担研究者 馬場 清
倉敷中央病院小児科
部長

いた。これらの症例について、冠動脈造影所見の推移、服薬状況、現在の状況などを診療録の記載を中心に分析した。

A.研究目的

川崎病後遺症としての冠動脈障害が、どのような経過を示すかについて検討することは重要である。病理学的な検索を含め多くの報告で、短期・中期的な経過についてはかなり明らかになってきた。しかし、長期的な経過について検討した報告は、それほど多くはなく、これからの検討課題だと考えられる。長期的な検討に際して問題となる後障害は、虚血性心疾患、それに伴う突然死、弁膜症、心機能障害などが主たるものと考えられる。今回は、当施設において、年齢が15歳以上になった症例の現在の状態を分析して、今後の経過観察を行う場合に、何に注目すべきかを明らかにする目的で研究を行った。

B.研究方法

当院のコンピュータ・データベースに収録されている昭和54年以降の川崎病罹患症例のうち、平成10年3月31日に年齢が15歳以上になった428例を対象とした。男性273例、女性155例で、年齢分布は図1の通りである。20歳未満265例、20歳以上30歳未満157例、30歳以上は6例であった。冠動脈造影検査は205例に施行されて

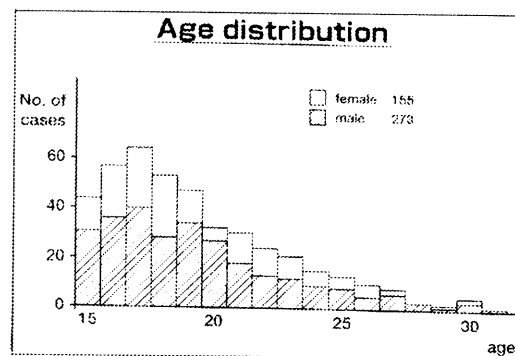


図 1

C.結果と考察

冠動脈造影検査は205例に施行されており、冠動脈障害ありと判定した症例は87例であった。その内50例に再検査が行われていた。再検査で34例は造影上冠動脈障害が残存していると判定した。残りは退縮したものと判定した。

冠動脈障害残存例の中で、服薬が望ましいと判断した症例は20例であった。怠薬した症例が4例あった。いずれも高校生になった頃から怠薬しているようであった。その内1例は、右冠動脈の閉塞を来した。自覚症状はなく、心電図変化も見られなかった。冠動脈造影上左冠動脈からの副血行路の発達が良好で、左室壁運動にも異常を認め

なかった。怠薬が契機になった可能性があるので、患児自身への十分な病気の説明が必要と考えられた。怠薬例は、受診回数が減ったり、受診しなくなることで把握できるので、服薬必要症例については受診状況を常にチェックできるシステムを作っておく必要があると考えられた。

突然死が1例あった。この症例は、両側に巨大冠動脈が存在し、服薬にもかかわらず瘤内血栓が認められ、左室瘤も合併していた。運動は禁止していたが、18歳の時通園途中で突然死した。この例は、心臓移植の適応となる症例であったと考えられる。

冠動脈バイパス術は、1例に施行された。2枝病変(左前下行枝と右冠動脈)で進行性の狭窄病変、運動負荷心電図のST変化、心筋シンチグラムの灌流欠損を理由に、バイパス術の適応とした。術後の経過は良好である。

2例で新たに出現した動脈瘤を認めた。この動脈瘤は、過去に冠動脈病変が存在し一見退縮したかに見えた部位に出現した。2例とも冠動脈壁の石灰化病変を認め、新たに出現した動脈瘤の近位部は狭窄の所見を認めた。

上記以外の症例で、心筋梗塞後の左心機能低下残存症例が2例あった。他に、エPILEプシーを合併した症例が2例あった。1例は急性期に出血性脳梗塞を合併し、その後遺症によるもので、服薬にもかかわらずコントロール不良の状態が続いている。他の1例は川崎病との因果関係は不明である。同様に川崎病との因果関係は不明であるが、白血病に罹患した例が2例あった。

D. 結論

平成10年3月31日の時点で年齢が

15歳以上になった川崎病罹患児428例の状況を分析した。

1) 冠動脈造影検査は205例に施行されていた。87例に冠動脈障害が残存していると判定された。その内50例に再検査が行われ、34例に冠動脈障害が残存していた。

2) 冠動脈障害残存34例中20例は、服薬が望ましいと判断した。4例で怠薬が見られ、1例で無症候性冠動脈閉塞を来した。怠薬は高校生になってからのようで、患者本人に対する十分な説明が必要と考えられた。

3) その他突然死が1例、ACバイパス施行例が1例、心機能障害例が2例、新たな動脈瘤発生が2例であった。また、エPILEプシーが2例、白血病が2例あったが、川崎病急性期の出血性脳梗塞によるエPILEプシー1例以外は、川崎病との因果関係は不明であった。

4) 川崎病の経過は多彩であり、症例に応じて病態を十分把握した上できめ細かい管理を行う必要があると考えられた。

E. 研究発表

1) 学会発表

Baba K, Ohnishi H, Nakata Y, Maruko T, Waki K, Tanaka M. Outcome of the patients with Kawasaki disease over 15 years of age in our hospital. Sixth International Kawasaki Disease Symposium, Hawaii, 1999

F. 知的所有権の取得状況

特になし

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究要旨

当施設における年齢が 15 歳以上の症例の経過についての分析